兄は塾へ通いつづけたし、はじめた猿楽のけいこもさぼることはなかった。

——突然あっけなく千蔵が逝った

さわ!?

母が床につきひとりおばあさまのところにむかう兄は、いつも明るく元気に出かけてゆく

またおばあさまのところに行ってもらえる?

はやく動けるようになるから——その間だけこらえてね

彦輔…

そのさみしさをかくした兄の背中が遠ざかってゆく風景を忘れることは、ないだろう。

そんな若みたいな肩
長いこと もんどると
筆が 持てなくなるぞ
しーかげんで
あやめよ 彦さん

うるさいよ
お前は。

そんな兄に、まわりの人たちが、いつも良くしてくれるのが私の心をあたたかくした。

寛延三(一七五〇)年の春。讃岐の各地で凶作がつづき、村の人も、もちろん父も困りはてた。頼恭様がお城の蔵から

三千石余りの米を皆にかしてくださって、なんとか急場を切りぬけた、というありさまだった。

いってまいります
おばあさまっ
その年の
五月二十一日
彦輔さんっ
おさわさんがっ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
バサッ
おっ田さまがっ

兄ちゃん！
——母が亡くなった。
それからの兄のことだけれど…
ハァハァ
母の死に顔と、父と兄の涙を見て、私の医者になりたいという希望は、医者になるのだという決意にかわった。

——もちろん
勉学にうち込む兄の姿勢が
変わることはなかった。

兄は十八歳になるまでの八年
間、一度も休むことなく、往
復四里の道を通いつづけたの
である。

——研究によると
栗山が芝山塾に入った
のは正しくは十三歳の
ときらしい。栗山が入
塾した翌年には芝山は
江戸・昌平校にかえっ
ているという。栗山が
芝山から実際に指導を
うけたのは、わずか一
年間——しかし、「天
人を仰ぐ」ように芝山
を尊敬していた栗山の
心は、のこりの七年間、
毎日江戸と牟礼の間を
往復していたことだろ
う。

しょう
昌平校
昌平校って
あの!?
おっおちゃけ彦さん!
お江戸のっ湯島のっ聖堂のお
お江戸で学問を――っいいなああ
にじり にじり
彦さんにはかなわんっ
ははははっはっ
好きな娘の話をしよるような顔をするっ
その頃の江戸は、大変なにぎわいだった。政の中心も京都からしだいに江戸にうつり、(長崎の出島をとおして異国の文化も)あらゆるものがこの地に集まりあふれていた。
高松藩儒・中村文輔様の口入で宝暦二(一七五二)年二月に、久保さんが一歩先に昌平坂の学問所に入った。

食べるもの、芝居や、相撲等の娯楽、書物、絵画ふろ屋や髪結い床が皆の情報交換の場となっている。

お金さえあれば、たいていのものは手に入る。知りたい事があれば情報はまわりにあふれている。そこから何を選ぶかは自由だ。その中の何を信じるかも自由だ。

真実も偽りもごっちゃまぜになって氾濫している。

宝暦三(一七五三)年、兄が旅立った江戸の街は、その華かさの裏に、いつも暗い影がおちている。そんな場所だった。——その影にのみ込まれたらおしまいだ。

江戸
昌平校

兄の、兄らしさのわかる話がある。それが中村蘭林先生が、兄に声をかけられるきっかけとなった。だまってすわっていれば人目をひくほど男前じゃないから。あはは。

はいっ
君…名前は？
柴野邦彦(彦輔)ですっ 蘭林先生
ほらっ♥
ひっ 茂さ…
あの柴野君はいつも、やる気満々だ
確か榴岡先生の門下でしたね
久保さんっ
ありましたっ 書棚の奥で見つけたんですっ
るんるん
るんっ
んーっ
ひっ
すっすいません
いちばん
ええ出来
だったのに…
じゃやっ
ええ何の講義でも誰の講義でも裏表がまるでない
うわ
ここだったら茂さんの背中にかくれてやるぞ…
柴野君といい久保君といい芝山先生はいい弟子にめぐまれて幸せですなあ